

佳作  
(中学部門)

札幌市立北都中学校 (北海道) 3年  
とみた はるな  
富田 遥乃

食う分さげあればいい

宮城の祖母

気が滅入った今年の春、母の実家宮城の祖母に様子伺いの電話をした。  
「ばあちゃん元気？」「なんもいづもど同じ。コロナ、コロナって津波で  
ばあーつと死んだ人ど比べだら屁でもないよ。濡れでないし、寒くない  
もの。どうなっかわがんないごとに人はビビるんだっちゃ。起きで食っ  
て寝る。あどなんもいらんべし。少し食う分さげあればいいちゃ。心配  
してけでありがどね。胸いっぱいよ」。誰かを想い想われること、そして  
食べること。当たり前だけど大事にしたいと思った。どこか行きたい、  
何かしたい、何か欲しいっていつも何かを欲している私は穴の空いたお  
鍋のようだ。命をつなぐ為、私が出れることを考え、実行したいと思  
った。